

# 公立義務教育諸学校の学級規模及 び教職員配置の適正化に 関する 検討会議ヒアリング

国立教育政策研究所  
平成23年7月15日

- I 新学習指導要領を実施するための実際の指導案から見た  
少人数学級の必要性の検討

発表者： 角屋 重樹 教育課程研究センター基礎研究部長

- II 学級規模に関する研究の動向ならびに学級規模が教師の  
学級づくりと生徒の変化に与える影響

発表者： 山森 光陽 初等中等教育研究部主任研究官

- III 全国学力・学習状況調査から見る学力の規定要因に関する  
分析

発表者： 妹尾 渉 教育政策・評価研究部主任研究官

# 新学習指導要領を実施するための実際の 指導案から見た少人数の必要性の検討

教育課程研究センター基礎研究部長  
角屋重樹

## これからの教育

- (1)「知識・技能」の習得とこれらを活用して課題解決  
するための「思考力・判断力・表現力等」の育成
- (2)知的活動等の基盤となる言語に関する能力の育  
成、各教科等における言 語活動の充実
- (3)「主体的に学習に取り組む態度」の育成  
↓  
児童一人一人に確かな学力の定着, 向上

# 理科の学習指導における 一人一人に確かな学力の定着, 向上

- (1) 予想や結果の設定 : 一人一人が予想や仮説をもつ
- (2) 実験計画の立案 : 自分予想や仮説のもとに実験を計画する
- (3) 実験の実施 : 自分という意識で実験を実行する  
(誤差や安全性)
- (4) 実験結果の処理 : 自分という意識で実験結果の整理
- (5) 考察・結論の導出 : 自分という意識で実験結果から  
結論を導き  
↓  
一人一人が科学的な概念や観察・実験の技能、科学的な思考力・表現力  
などを獲得

## ○ 学習指導過程の実際

### (1) 事例

第5学年「振り子の運動」の1単位時間(45分)の学習指導過程

### (2) 学習指導過程における時間配分

新学習指導要領のねらいを実現する理想的な学習指導過程の時間配分と

実際の学習指導過程での時間配分の対比

主な学習活動	想定時間	実際時間	学習展開上の課題
<b>問 題</b> 振り子が1往復する時間は、何によって変わるのだろうか。			
<b>予想や仮説の設定</b> ○振り子が1往復する時間は何によって変わるかについて話し合う。 ○振り子が1往復する時間は、振り子の長さ、おもりの重さ、振れ幅のいずれの条件が関係しているのかについて予想や仮説をもつ。	10分	5分	予想や仮説をもつときは、理由も自分なりの言葉で表現させることが大切であるが、実験の時間を確保するために、この段階で指導に時間をかけられないのが現状である。
<b>実験計画の立案</b> ○実験の計画を立てる。	10分	5分	変える条件と変えない条件を区別してすることの必要性に気付かせ、それを実現する実験計画を立てさせることが大切であるが、教師の方で条件制御の方法のみを教えて、児童自身が考える時間を確保していないのが現状である。
<b>実験の実施</b> ○おもりの重さ、振り子の長さ、振れ幅を変えて、振り子が1往復するときの時間を調べる。	30分	20分	誤差を少なくするために、複数回実験を行うことを指導することが大切であるが、各グループに対して十分に指導になっていないのが現状である。

<b>実験結果の処理</b> ○実験結果から、振り子が1往復する時間に関する条件を発表する。	15分	10分	実験結果を処理するには、平均することやできる限り誤差をなくすことを指導する必要がある。一人一人にきめ細かく指導する時間を確保できないのが現状である。
<b>考察・結論の導出</b> ○実験結果から何が言えるのか考え、自分の考えをまとめる。	10分	5分	実験結果をもとに、振り子が1往復する時間が変わる要因を考えさせ、自分の考えを書かせることが大切であるが、実験結果を出すまでに時間がかかり、この段階での指導に時間をかけられないのが現状である。
<b>結 論</b> 振り子が1往復する時間は、振り子の長さによって変わり、おもりの重さや振れ幅によつては変わらない。			
	[合計] 75分	[合計] 45分	

# 学習指導の実際からいえること

これまでの学級規模から少人数の学級規模にすると

教師が児童一人一人と関わる時間が増え、きめ細かな指導ができ

45分間の学習展開でも、これまでの学級規模に比べると、一人一人が確かな学力をより定着、向上を図ることができるようにになると考える。

## 学級規模の少人数化の必要性

## [小学校理科]

### ○ 学習指導過程の実際

新学習指導要領のねらいを実現する理想的な学習指導過程と実際の学習指導過程における時間の配分の対比

第5学年「振り子の運動」の1単位時間（45分）の授業を例に、40名の学級規模で、新学習指導要領のねらいの一つである、児童一人一人に確かな学力の定着、向上を図る上での理想的な時間配分を「想定時間」、実際に実施されている平均的な時間配分を「実際時間」として、以下に示す。

主な学習活動	想定時間	実際時間	学習展開上の課題
<b>問 題</b> 振り子が1往復する時間は、何によって変わるのだろうか。			
<b>予想や仮説の設定</b> ○振り子が1往復する時間は何によって変わるかについて話し合う。 ○振り子が1往復する時間は、振り子の長さ、おもりの重さ、振れ幅のいずれの条件が関係しているのかについて予想や仮説をもつ。	10分	5分	予想や仮説をもつときは、理由も自分なりの言葉で表現させることが大切であるが、実験の時間を確保するために、この段階で指導に時間をかけられないのが現状である。
<b>実験計画の立案</b> ○実験の計画を立てる。	10分	5分	変える条件と変えない条件を区別してすることの必要性に気付かせ、それを実現する実験計画を立てさせることが大切であるが、教師の方で条件制御の方法のみを教えて、児童自身が考える時間を確保していないのが現状である。
<b>実験の実施</b> ○おもりの重さ、振り子の長さ、振れ幅を変えて、振り子が1往復するときの時間を調べる。	30分	20分	誤差を少なくするために、複数回実験を行うことを指導することが大切であるが、各グループに対して十分に指導になっていないのが現状である。
<b>実験結果の処理</b> ○実験結果から、振り子が1往復する時間に関する条件を発表する。	15分	10分	実験結果を処理するには、平均することやできる限り誤差をなくすことを指導する必要がある。一人一人にきめ細かく指導する時間を確保できないのが現状である。
<b>考察・結論の導出</b> ○実験結果から何が言えるのか考え、自分の考えをまとめる。	10分	5分	実験結果をもとに、振り子が1往復する時間が変わる要因を考えさせ、自分の考えを書かせることが大切であるが、実験結果を出すまでに時間がかかり、この段階での指導に時間をかけられないのが現状である。
<b>結 論</b> 振り子が1往復する時間は、振り子の長さによって変わり、おもりの重さや振れ幅によっては変わらない。			
	[合計] 75分	[合計] 45分	

○少人数の学級規模にすると、実際の学習展開でこれまでの学級規模に比べると、

児童一人一人に確かな学力の定着，向上を効果的に図ることができるようになる。

## 理科において学級規模の少人数化を進める根拠

### I 教科の目標から導かれる根拠

○今回の学習指導要領の改訂においては，理科の目標について「自然の事物・現象についての理解」という文言に新たに「実感を伴った」という文言を追加し，「自然の事物・現象についての実感を伴った理解」とされたところである。

自然に親しみ，見通しをもって観察，実験などを行い，問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに，自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り，科学的な見方や考え方を養う。

○理科の目標については，身に付けた知識や技能を活用し，思考・判断・表現する力を育成するということを「実感を伴った理解」に込めたところである。

その背景として、平成15年（2003年）に実施された国際的な学力調査（OECDのPISA調査及び国際教育到達度評価学会（IEA）のTIMSS調査）の結果からは、我が国の子どもたちの学力は、全体としては国際的に上位にあるものの、

- ・ 読解力や記述式問題に課題があること、
- ・ PISA調査の読解力の習熟度レベル別の生徒の割合において、前回調査（2000年）と比較して、成績中位層が減り、低位層が増加しているなど成績分布の分散が拡大していること、

などの低下傾向が見られたことがある。

○目標にある「実感を伴った理解」には，次の3つの意味が込められている。

（ア）**視点1**：具体的な体験を通して形づくられる理解

児童が自らの諸感覚を働かせて，観察，実験などの具体的な体験を通して形づくられる理解である。

（イ）**視点2**：主体的な問題解決を通して得られる理解

児童が自ら問題を見だし，見通しをもって追究するといった主体的な問題解決を通して得られる理解である。

（ウ）実際の自然や生活との関係への認識を含む理解

理科を学ぶことの意義や有用性を実感し，理科を学ぶ意欲や科学への関心を高めることにつながるように，実際の自然や生活との関係への認識を含む理解となるようにする。

### II 教科の改善事項から導かれる根拠

○中央教育審議会の答申において，小学校理科の改善の具体的事項として6項目述べられている。その中の一つに以下の項目が挙げられている。

（エ）**視点3**：児童の科学的な見方や考え方が一層深まるように，観察・実験の結果を整理し考察し表現する学習活動を重視する。また，各学年で重点を置いて育成すべき問題解決の能力については，現行の考え方を踏襲しつつ，中学校との接続も踏まえて見直す。

ここでは，言語活動の充実と中学校まで見据えた問題解決の能力について示している。観察，実験において結果を表やグラフに整理し，予想や仮説と関係

付けながら考察を言語化し、表現することを一層重視する必要がある。また、小学校では学年ごとに整理してある問題解決の能力を踏襲しつつ、第6学年では中学校との接続も考え見直しを図るものである。

- 「読解力や記述式問題に課題があること」への手立てとして、言語活動の充実を柱の一つとした。理科における言語の活動の充実は、例えば、自らの観察記録や実験データを表に整理したりグラフに処理したりすることや、それらの表やグラフなどを活用しつつ科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりすること、このような学習活動が学級の中のグループや学級全体で話し合うことなどが考えられる。こうした活動を支援していくためには、個別の学習指導がより一層必要となる。

### Ⅲ 学習活動の展開から導かれる根拠

#### グループ別学習における課題の克服

- 理科は、基本的に4名で1グループを構成し、学習活動を展開していく。理科室の座席も4名で1テーブルの構造となっている。したがって、40名の学級規模であると、教師は10グループの観察、実験や話し合いに対応していくことになる。これが、24名の学級規模であると、教師は6グループに対応していくことになり、子ども一人一人のより深い理解が実現できる。

- 40名規模と24名規模の理科室における教師の指導の範囲は、以下のようになる。

40名規模の理科室の状況	24名規模の理科室の状況																								
<div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">教 卓</div> <div style="border: 2px solid blue; padding: 10px;"> <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> </tr> </table> </div>	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	<div style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">教 卓</div> <div style="border: 2px solid blue; padding: 10px; margin-bottom: 10px;"> <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> </tr> </table> <p style="text-align: center; margin: 5px 0;"><b>教師の指導の範囲</b></p> <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> <td style="padding: 5px;">児童机 (4名)</td> </tr> </table> </div>	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)
児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)																							
児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)																							
児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)																							
児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)																							
児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)																							
児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)																							
児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)																							
児童机 (4名)	児童机 (4名)	児童机 (4名)																							

## 参 考： 学習指導の展開と各視点との関係

学習指導の展開	各視点との関係（これからの授業）
問題の把握・設定	<p>少人数の学級規模であると、児童一人一人の見方や考え方を基盤にした気付きや疑問を集約し、類型化させることから、問題を把握・設定させることが可能となる。<b>【視点2】</b></p> <p>これまでのような学級規模であると、<u>児童一人一人の気付きや疑問を集約し、類型化していくことに多くの時間を要し、児童の見方や考え方を基盤にした展開が困難である。</u>また、こうした展開をしようとすると、少人数学級ならば30分以内で済むところを、45分で収まらないケースが多くなるのが実態である。</p>
予想や仮説の設定	<p>少人数の学級規模であると、児童一人一人に、問題に正対した予想や仮説を設定させ、実証できる計画を立てさせることが実現できる。この場合、4人で構成するグループが約6グループとなると、児童同士の意見交換の時間が短縮され、きめ細やかな指導が可能となる。<b>【視点2】</b></p> <p>これまでのような学級規模であると、<u>児童一人一人に、問題に正対した予想や仮説を設定させるために多くの時間を要し、実験計画を教師主導で立てることになってしまう。</u>児童同士の検討や意見交換のための時間を確保することは極めて困難である。</p>
観察、実験等の実施	<p>少人数の学級規模であると、個別またはグループで実験器具や観察道具を操作させ、安全面等の配慮しながら実施させることが可能となる。また、4人で構成するグループが約6グループになると、実験器具の不備等の対応もスムーズにでき、児童一人一人に目的をもって自分の予想や仮説を検証させていくことができる。<b>【視点1】</b></p> <p>これまでのような学級規模であると、個別またはグループで実験器具や観察道具を操作しながら展開していくのに、<u>安全面等の配慮にも時間を要し、教師の演示実験で終わってしまうケースが多い。</u>また、実験器具の不備等への対応に追われ、児童一人一人が目的を見失わず、予想や仮説を検証しているかどうか把握し指導することが困難となる。</p>
観察、実験の結果の考察及び結論の導出	<p>観察、実験の結果を処理し、そこから何が言えるのか考えさせ、児童の考えが適切に表現できるように表現方法を工夫させる必要があるが、PISA等の国際調査から、観察、実験の結果から何が言えるのか考察し、自分の考えを記述することに課題があることが明確である。</p> <p>この課題の解決に向けて、少人数の学級規模であると、児童一人一人に考えさせ、児童の考えが適切に表現できるように表現方法を工夫させることが可能となる。この場合、4人で構成するグループが約6グループになると、児童同士の情報交換や検討の時間も短縮され、児童の学習意欲を持続させることが可能となる。<b>【視点3】</b></p> <p>これまでのような学級規模であると、<u>限られた授業時間の中で児童による情報交換や検討がパターン化し、児童の豊かな言語活動の充実に結び付かない場合が多い。</u>また、4人で構成するグループが10グループ程度であると、児童同士の情報交換が45分では収まらず、学習意欲を持続させることが困難となる。</p>

# 学級規模の少人数化の必要性

# [小学校社会科]

## ○ 学習指導過程の実際

社会科の授業では、児童一人一人が社会的事象を具体的に観察・調査したり、資料を効果的に活用したり、調べたことや考えたことを表現したりできるようにすることが求められている。そのため、問題解決的な学習や体験的な活動と表現活動の充実が授業改善のポイントである。

(例) 第5学年 小単元名：「自然条件で特色ある地域のくらし」

本時の目標：家屋の造りを調べることを通して、沖縄の人々が自然環境に適応したり生かしたりして生活していることを理解できるようにする。

主な学習活動	想定時間	実際時間	学習展開上の課題	根拠
<p><b>つかむ</b></p> <p>○二つの資料を比較する。一年を通じて気温が高く台風が多く通過する事実と人口も観光客も増えている事実に着目する。</p> <p>○「たぶん～ではないか」と予想する。</p>	15分	10分	<p>児童に学習問題を自分の疑問と結び付けてつかませることが主体的な問題解決に不可欠である。そのため、例えば二つの資料を丁寧に読み取って比較したり疑問や予想を子ども一人一人の言葉で発言させたりしながら学習問題を設定したいが、時間が不足し、教師がやや唐突に提示する傾向がある。</p>	次ページ II-1
<p>学習問題</p> <p>沖縄の人々はどのように気候を生かしたくらしをしているのだろうか — 一家のつくりで調べてみよう —</p>				
<p><b>調べる</b></p> <p>○家の造りを表わした資料(イラストと写真)から、気候に適応した工夫を調べて発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・伝統的な家屋</li> <li>・現在の家屋</li> </ul> <p>○二つの資料から、共通する工夫点をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・防風、防砂</li> <li>・水不足対応</li> <li>・暑さ対策</li> </ul>	20分	15分	<p>資料活用の技能は、資料を活用した情報の収集・読み取り・整理であり、いずれも児童自身に行わせ、教師が認めながら育てていくことが必要である。ここでは、各々の児童が読み取った事実やそこからつかんだ社会的事象の意味(「何のための工夫か」)をノートに書かせて発表させ、一人一人の調べ活動を価値付けたい。しかし、学級の人数が多いと全員に発表させる時間が保障できないため、代表者のみの発表になる。</p>	次ページ I-1 II-2
<p><b>考える</b></p> <p>○台風が多いのに水不足であるという事実に着目し、沖縄の地形の特色を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東京都の地形との比較</li> <li>・台風を生かしたダム</li> <li>・地下ダム</li> </ul>	20分	15分	<p>目標を実現するためには、ただ調べたことを発表するだけではなく、そこから社会的事象を焦点化して考えさせる必要がある。ここでは、川が少なく、また短くて流域面積が狭いことを他地域の地形と比較させて気付かせ、子どもなりの言葉で説明させたいが、これも人数が多いと十分な時間はとれない。</p>	次ページ I-1 I-2 II-1
<p><b>まとめる</b></p> <p>○「沖縄の人々は…」で書き出し、気候に適応したり生かしたりしている具体的な事実を入れて、学習したことを自分の言葉でまとめる。</p>	15分	5分	<p>学力を育てるためには、ふり返る活動が重要であるが、調べる活動に時間がかかってまとめが十分にできずに終わってしまうことが多い。学習問題の答えを一人一人の児童に言わせ、みんな話合せてまとめたいが、学級の人数が多いと、時間を気にして数人に発言させ、あとは各々ノートに記入させて終わることが多い現状がある。</p>	次ページ I-1 II-3
	[合計] 70分	[合計] 45分		

## 社会科において学級規模の少人数化を進める根拠

### I 新学習指導要領の趣旨を実現するために

#### 1 中央教育審議会答申

○新学習指導要領社会は、以下の中央教育審議会答申の「社会科、地理歴史科、公民科の改善の基本方針」を踏まえて改訂が行われている。

- ・～社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向で改善を図る。
- ・～習得すべき知識、概念の明確化を図るとともに、コンピュータなども活用しながら、地図や統計などの各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視する方向で改善を図る。

(一部抜粋)

すなわち、一人一人に主体的な調べ学習を保障し、知識・概念を身に付けさせた上で、社会的事象の意味や意義を考えたり、それを言葉で表現したりする学習を充実させることを求めている。

○小学校社会科改善の具体的事項

- ・～作業的、体験的な学習や問題解決的な学習を一層充実させることにより、学習や生活の基盤となる知識・技能を習得させるとともに、それらを活用して観察・調査したり、各種の資料から読み取ったことを的確に記録し、比較・関連付け・総合しながら再構成する学習や考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習の充実を図る。

(一部抜粋)

答申では、小学校において、上記のように「調べる過程」や「考える過程」を大切にし、それらを言語表現を通して交流し合う学習の充実を求めている。

#### 2 学習指導要領の改訂

○目標の改訂と言語活動の充実

- ・能力に関する目標  
～社会的事象の意味について調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。  
\*下線部分が追加
- ・指導計画作成上の配慮事項  
～観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ること。

(一部抜粋、下線筆者)

答申を受けて、学習指導要領では、「考えたことを表現すること」と「体験的な活動に基づく表現活動の充実」などが明示された。

◎新学習指導要領の趣旨を実現するためには、児童一人一人が調べたことをもとにして考えたことを言語などで伝え合う活動が大切であり、児童の人数が多ければ、この活動の時間が制約される。特にお互いの考えを深めていく学習は、グループ活動ではなく、教師がリードあるいはサポートしつつ行う一斉指導の形態で行うことが望ましい。そのため、全ての児童に発言させることが望まれるが、学級の人数が多いとできない状況がある。

## Ⅱ 確か学力を育成するために

## —観点別学習状況の評価の観点の変更—

### 1 社会的な思考・判断・表現

社会的な思考・判断



社会的な思考・判断・表現

改訂に伴い、評価の観点も一部変更され、「考える力と考えたことを表現する力」を一体的に評価することが求められている。以下は、国立教育政策研究所で作成した「評価規準の設定例」である。一人一人の児童が問いや予想調べる見通しをもつことや事実を事実をつなげて考えること、それらを表現することの大切さを具体的に示している。

#### 【社会的な思考・判断・表現】

- ・～（社会的事象）について学習問題や予想、学習計画を考え表現している。
- ・～の様子を～と関連付けたり、比較したりして、～（社会的事象の意味）について考えたことを適切に表現している。

### 2 観察・資料活用の技能

観察・資料活用の技能・表現



観察・資料活用の技能

また「観察・資料活用の技能」が社会科で育てるべき技能であることが明示される形となったため、あらためて「観察・資料活用の技能」の趣旨を以下のように「評価規準の設定例」を通して具体化した。

#### ●観察・資料活用の技能

- ・～（社会的事象）について、必要な情報を集めて読み取っている。
- ・調べたことを整理して～（作品など）にまとめている。

◎児童一人一人にきめ細かな指導と評価を行うためには、疑問や予想、調べる見通しなどをもたせ、それらを評価してその後の指導につなげること、また調べたことをもとにして考えたことを表現させて評価し、さらに指導に生かすことなどが求められる。特に「社会的な思考・判断・表現」の評価は、ペーパーテストなどによる授業後の評価だけでなく、指導している場面で児童一人一人の考えの根拠など、思考の結果とともに過程を評価することが重要である。そのためには、授業時間の中で児童一人一人の考えを十分に表現させ、教師がそれを価値付けたり再発問をして深めさせたりする時間が必要である。しかし、学級の人数が多いと発言時間に制約が生じるため、全ての児童の思考状況を評価し指導することが困難になり、授業中ではなく授業後にノートの記述内容などを通して評価する方法に依存する傾向がある。

### 3 社会的事象についての知識・理解

児童に知識や概念をつかませるためには、学習のまとめが大切である。評価の観点の一部変更に伴って、「社会的事象についての知識・理解」の観点の趣旨を「評価規準の設定例」で以下のように具体化した。

#### ●社会的事象についての知識・理解

- ・～（社会的事象の様子）について理解している。
- ・～（社会的事象の意味）について理解している。

◎問題解決的な学習には、学習問題とその答えが必要である。これまでの社会科では、調べる活動と表現する活動に時間が要することから、学習のまとめ、すなわち学習問題の答えを学級全体でまとめる活動が疎かになりがちであった。そこで上記のように、「評価規準の設定例」を通して、「知識・理解」を社会的事象の様子と意味に分けて具体化し、学習まとめを確実にを行うことを求めている。

# 学級規模の少人数化の必要性

# [小学校国語科]

## ○ 学習指導過程の実際

1 単元名 ファンタジーを楽しもう (第4学年)				
2 単元の目標 ファンタジーのシリーズを、叙述を基に想像して読んだり、感想を発表し合って感じ方について違いのあることに気付いたりすることができる。				
3 評価規準 【国語への関心・意欲・態度】 ・ファンタジーのシリーズを読んで、作品の好きなところや心がひかれるところを見付けながら感想を述べようとしている。 【読む能力】 ・シリーズを通して描かれた登場人物の性格や気持ちの変化などを、物語の展開に注意しながら叙述を基に想像して読んでいる。 ・ファンタジーを読んだ感想を、どの叙述に基づいているか、自分の経験などとどう関連しているのかを明らかにしながら発表し合い、 <u>一人一人の感じ方について違いのあることに</u> 気付いている。 【言語についての知識・理解・技能】 ・「漢字仮名交じり文」という日本語の表記の仕方に気を付けて、文や文章を読んでいる。				
4 教材 ファンタジーのシリーズ作品『車のいろは空のいろ』(あまんきみこ作)				
5 主な学習活動(単元の指導計画(全8時間))				
	学 習 活 動	想定 時間	実際 時間	指導上の課題
第一 次	○ファンタジーのシリーズ『車のいろは空のいろ』所収の作品の読み聞かせを聞き、おもしろいところ、不思議だと思ったところを述べ合う。 ○ファンタジーのシリーズ作品から自分のお気に入りを見付け、感想を発表し合おうという学習課題を設定する。 ○特設した学級文庫を活用し、『車のいろは空のいろ』所収の作品の並行読書始める。	3	2	・単元の導入部では、一人一人が学習の見通してもてるよう丁寧に指導する必要があるが、40人学級では課題意識を喚起する時間を十分確保できない。 ・40人に対応するシリーズ作品を準備することが難しく、物理的に支障がある。
第二 次	○『車のいろは空のいろ』所収の「白いぼうし」について、読み聞かせを聞くとともに、以下のような点から繰り返し読みながら、自分の感想をまとめる。 ◇物語の展開を確かめながら ◇心がひかれるところを確かめながら ◇なぜそこが好きなのか、心がひかれるのかを考えながら ◇互いの好きな描写やその解釈について友達と交流しながら	5	4	・体験や思考・感情などの違いによる一人一人の感じ方の違いを丁寧に取り上げる必要があるが、40人学級では一部の児童の読みを取り上げておわてしまいがちになる。 ・教師も40人全員の感じ方やその根拠を把握することは困難。
第三 次	○並行読書してきたシリーズ作品の中から作品の一つを選び、第二次で行ってきた読み方を用いながら、作品の好きなところ、心がひかれるところとそのわけをまとめる。 ○同じ作品を選んだ人と感想を述べ合ったり、異なる作品を選んだ人と感想を述べ合ったりして互いの感じ方を交流し、学習のまとめをする。	4	2	・40人分の本をそろえるのは難しく、やむを得ずコピーなどをして対応している現状がある。 ・単元の評価を行う場合にも、40人分の評価は時間的にかなり難しくなる。

## 国語科において学級規模の少人数化を進める根拠

### I 学習指導要領・国語科改善の基本方針及び改訂の要点から

- 中央教育審議会答申（H20）における国語科の改善の基本方針は、次のとおりである。

「…実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること…に重点をおいて内容の改善を図る。」

- また、この方針を受けた改訂の要点の一つに「言語活動の充実」を掲げて、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、内容の（2）に日常生活に必要とされる記録、説明、報告、紹介、感想、討論などの言語活動を具体的に例示している。
- 国語科はこのように、児童一人一人が課題を探究し国語の能力を身に付けられるよう、言語活動を通して指導事項を指導することとしている。
- 従来であれば、教材文を場面ごと段落ごとに詳細に読み取らせる指導が中心であり、正確に情報を取り出せればよく、児童一人一人の課題意識とは無関係に、一斉指導によって正解の解釈に導く指導で事足りていた。
- しかし、国語科で育成すべき能力は児童の「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる能力」である。より具体的には、自ら本や文章を選んで読み、解釈したり自分の考えを形成して交流したりするといった幅のある能力を調和的に育成する必要がある。  
また、「基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力」を身に付けるためには、上述のように、言語活動を通じた指導、つまり一人一人の課題意識に裏打ちされた国語の学習指導が不可欠である。
- そのためには、学級の児童数を、教師が確実に指導できる人数にしていく必要がある。

### II 国語科の具体的な指導事項から

- 1に示した事例では、第3学年及び第4学年「C読むこと」の指導事項「ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。」と指導事項「オ 文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。」とを取り上げて指導するものである。  
その際、「C読むこと」の言語活動例「ア 物語や詩を読み、感想を述べ合うこと。」を具体化し、ファンタジーのシリーズ作品を読んで感想を述べ合うことを通して指導することにより、指導の効果を高めようとしている。
- 児童の日常の読書生活においては、単に与えられた文章の与えられた場面を正確に読み取るにとどまらず、自ら本や文章を選んで読み、解釈を交流することで互いの読みのよさを見付けるなどの読書行為が行われる。学習指導要領・国語の改善の基本方針を踏まえて、目標や内容を実現するためには、そうしたことに資

するような読む能力を付ける必要がある。

○ ここでは特に、「一人一人の感じ方の違い」を取り上げて指導することをねらいとしている。40人学級においては、次のような点で大きな課題が出てくる。

①取り上げるシリーズの本を児童一人一人が手に取れるだけ確保することが難しい

○ ここで読む対象としては、単独の教材文だけではなく、シリーズを取り上げている。一人一人が本や文章を選んで読むことができるようにすることで、「シリーズを通して描かれた登場人物の性格や気持ちの変化などを、物語の展開に注意しながら叙述を基に想像して読む」能力を確実に育成しようというものである。登場人物の性格や気持ちの変化は、シリーズを通してより克明に描かれていく。実生活に生きる読む能力を育成する上では、教材文を読み取るだけではなく、シリーズとして読むことが重要なものとなるのである。

○ しかし、40名に対応するシリーズの本を取りそろえることは、物理的に難しさを伴う。学校図書館や地域の図書館の利活用が重要になるが、どの学校の4年生も同時期に同シリーズを取り上げて読むことになるため、十分には読書環境を整えることが難しくなるのである。

②「一人一人の感じ方の違い」を全員の児童について意識させるのが難しい

○ ここでは、児童を一律の正解の解釈に導くことを目的とするのではなく、ファンタジー作品を読み、「一人一人の感じ方について違いのあることに気付く」ことをねらうものである。日常生活で起きた事柄に対して、一人一人感じ方・受け止め方が異なるように、文章の解釈もまた、児童一人一人の経験や思考や感情の違いを反映して異なるものとなる。

○ こうした読む能力を育成するためには、一人一人の解釈を丁寧に取り上げる必要がある。本来はそれらを相互に関連付けたり、共通点や相違点を明らかにしたりすることが必要である。しかし、40人学級では、一人1分ずつ意見を取り上げて列挙するだけで1時間の授業が終わってしまう。

③一人一人の児童への確かな評価が難しい

○ こうした読む能力は、単に知識の有無を把握するだけの評価では、指導に生きる評価を実現することが難しい。一人一人の解釈に表れる主体的な思考や判断を見極めて評価することが重要である。

しかし、40人学級ではそれもまた多くの時間を必要とする。

#### 国語科において学級規模の少人数化を進めることで期待される効果

○ 少人数学級編成を進めることにより、上述のような課題が改善される。このことにより、国語科の授業において、児童個々の思考力や判断力、表現力等をきめ細かく指導し、伸ばすことが期待できる。

## 学級規模の少人数化の必要性

## [教育の情報化]

### ※ 教育の情報化

- ・ 情報教育 ～ 子どもたちの情報活用能力の育成 ～
- ・ 教科指導における ICT 活用  
～ 各教科等の目標を達成するための効果的な ICT 機器の活用 ～
- ・ 校務の情報化 ～ 教員の事務負担の軽減と子どもと向き合う時間の確保 ～

### ○ 実際の学習活動と学習展開上の課題

主な学習活動	学習展開上の課題
○デジタルコンテンツ等の活用により、疑問について深く調べたり、自分に合った進度で学んだり、一人一人の理解やつまずきの状況に対応した課題に沿って学びを進めたりする。	ICTの特徴を生かした学びを行うためには、児童生徒が学習者用デジタル教科書はもちろん、個別学習用教材等のソフトウェアを使いこなすための指導が必要である。また、コンピュータ等を活用して調べたり個別に学んでいる児童生徒の状況に応じて、適切に指導・助言することも大切である。 児童生徒のコンピュータ画面を教師用コンピュータで確認するといった機能を持つネットワーク管理ソフト等が導入されていることもあるが、指導・助言のためには各人の席に行く必要がある。そのため、学級の人数が多いと、一人一人に操作に関する助言をしたり、調べ方や学び方に関する指導等を行う時間が不足することも考えられる。
○コンピュータや提示機器等を活用し、教室内の授業で子どもたち同士がお互いの考え方の共有や吟味を行いつつ意見交換や発表を行ったり、学校外・海外との交流授業を通じて、お互いを高め合ったりする。	事前に自らの考えを明確にしておくことが意見交換や発表を行うためには重要である。そして、ICTを用いて自らの考えを表現することが、意見交換の場面を学級から世界へと広げることとなる。 学級の人数が少なければ、一人一人の児童生徒がICTを用いて考えを深め、整理し、表現するために十分に指導を行うことができる。 また、例えば4人グループで意見交換を行わせる場合、40人規模の学級では、一人の教師が10グループを対象に、意見交換の様子を観察し助言することとなり、指導不足のためグループ内での考え方の共有や吟味が十分に行えないことも考えられる。

### 教育の情報化において学級規模の少人数化を進める根拠

#### I 情報教育推進のために

**視点1** ICT機器の基本操作に関する指導や、適切に情報手段を活用するための指導を行うためには、学級規模の少人数化が求められる。

#### ① 情報教育の目標

情報教育が目指す情報活用能力には、「コンピュータ等の情報手段を適切に活用する能力」が含まれている。

A 情報活用の実践力

課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力

#### B 情報の科学的な理解

情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解

#### C 情報社会に参画する態度

社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度

### ② 新学習指導要領における情報教育

新学習指導要領においては、情報活用能力の育成が重視されており、各教科等においてコンピュータ等の基本的な操作とともに、情報通信ネットワーク等の適切な活用について指導することが求められている。また、中学校の技術・家庭科等において、情報に関する内容の深化・拡充が図られている。

#### ・平成20年1月の中央教育審議会答申

「社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項」の一つとして「情報教育」が挙げられ、「情報活用能力をはぐくむことは、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とともに、発表、記録、要約、報告といった知識・技能を活用して行う言語活動の基盤となるもの」として重要性が指摘される。

#### ・新学習指導要領

小・中・高等学校学習指導要領の総則に、各教科等において、コンピュータや情報通信ネットワークの活用、情報モラルに関する指導の充実について明記。

情報活用能力の育成に係る中学校技術・家庭科（技術分野）や高等学校普通教科「情報」における内容を深化・拡充

#### <小学校総則の活動例>

基本的な操作：キーボードなどによる文字の入力、電子ファイルの保存・整理、インターネットの閲覧、電子メールの送信など

情報手段を適切に活用できるようにするための学習活動：文章の編集・図表の作成、様々な方法での情報の収集・調査・比較、情報手段を使った交流、調べたもののまとめ・発表などの学習活動

#### <中学校総則の活動例>

情報手段を適切かつ主体的、積極的に活用できるようにするための学習活動：課題を解決するため自ら効果的な情報手段を選んで必要な情報を収集する、様々な情報源から収集した情報を比較し必要とする情報や信頼できる情報を選び取る、情報手段を用いて処理の仕方を工夫する、自分の考えなどが受け手に伝わりやすいように表現を工夫して発表したり情報を発信したりする 学習活動など

#### <中学校技術・家庭科の活動例>

デジタル作品の設計・製作：デジタル作品の制作を通して、メディアの特徴と利用方法を知り、多様なメディアを複合し、表現や発信ができるようにするとともに、目的に応じてデジタル作品の設計を工夫する能力を育成する

プログラムによる計測・制御：計測・制御のためのプログラムの作成を通して、コンピュータを用いた計測・制御の基本的な仕組みを知り、簡単なプログラムの作成ができるようにするとともに、情報処理の手順を工夫する能力を育成する

## II ICTを活用した新たな学びの実現のために

**視点2** 21世紀を生きる子どもたちに求められる力を育むための新たな学びを実現するために、ICT機器の特徴を生かすとともに、学級規模の少人数化によるきめ細やかな指導が求められる。

① 21 世紀を生きる子どもたちに求められる力

21世紀を生きる子どもたちは、これまで以上に、知識や情報を活用する能力等が求められている。

- ・変化の激しい社会を担う子どもたちには、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた「生きる力」の育成がますます重要となっており、確かな学力の育成には、基礎的・基本的な知識・技能の習得、これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等及び主体的に学習に取り組む態度等を育むことが必要である。
- ・思考力・判断力・表現力等を育むためには、各教科において、基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと習得させるとともに、観察・実験やレポートの作成、論述といった知識・技能を活用して行う言語活動をより充実させる必要がある。
- ・情報活用能力を育むことは、必要な情報を主体的に収集・判断・処理・編集・創造・表現し、発信・伝達できる能力等を育むことである。また、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とともに、知識・技能を活用して行う言語活動の基盤となるものである。
- ・OECDが検討した「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要な能力（「主要能力：キーコンピテンシー」）の中に、「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」として「知識や情報を活用する能力」や「テクノロジーを活用する能力」が含まれている。

② 21 世紀を生きる子どもたちに求められる力を育む教育を行うために

21世紀を生きる子どもたちに求められる力を育むためには、一斉指導に加えて、ICTの特徴を生かした個別学習、協働学習を推進していく必要がある。

- ・情報通信技術の、時間的・空間的制約を超える、双方向性を有する、カスタマイズを容易にするといった特長を生かすことが重要。
- ・子どもたちの学習や生活の主要な場である学校において、教育の情報化を推進し、教員がその役割を十分に果たした上で、情報通信技術を活用し、その特長を生かすことによって、一斉指導による学び（一斉学習）に加え、子どもたち一人一人の能力や特性に応じた学び（個別学習）、子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び（協働学習）を推進していく必要がある。

## 参 考： 学習場面と各視点との関係

学習場面	各視点との関係（これからの授業）
<p>コンピュータや新たなソフトウェアの操作等を学ぶ。 デジタル作品の設計・制作やプログラミングについて学ぶ。 <b>[視点1]</b></p>	<p>少人数の学級規模であると、児童生徒一人一人のつまづきなどの状況に応じた指導に十分に時間をかけることが可能となる。 これまでの学級規模では、つまづいている児童生徒一人一人に対して指導している間に時間がなくなり、すべての子どもに対して指導を行うことが困難となる。そのため、その後のICTを活用した授業を行うことができなくなる可能性もある。 特に、基本操作等でつまづいたままの子どもたちが、授業においてICTを活用することに対して抵抗感を抱くようなことは避けなければならない。</p>
<p>自ら設定した課題の解決のために必要な情報を収集したり処理・表現する。 自分の状況に応じて知識や技能の習得を図る。 <b>[視点2（個別学習）]</b></p>	<p>少人数の学級規模であると、児童生徒の課題や状況に応じて、どのようにICTを活用するのかといったきめ細かな指導が可能となる。 これまでの学校規模では、限られた授業時間の中で、一人一人異なっている学習状況を教師が把握することが困難となり、学習の進め方やICTの活用に関する指導を十分に行うことができなくなる可能性もある。 ICTを活用した個別学習の良さ生かすためには、児童生徒の状況に応じて、励まし、認め、より深い学びへと導く教師の役割も重要である。そのため、学習のすべてをICTに任せてしまうことは避けなければならない。</p>
<p>一人一人の意見をグループや学級、さらには他校の児童生徒と共有・吟味し、よりよい考えを作り上げる。 <b>[視点2（協働学習）]</b></p>	<p>少人数の学級規模であると、児童生徒一人一人に対して、考えを深め、整理し、さらに、他の児童生徒と共有するための適切な表現について十分に指導することが可能となる。 これまでの学級規模では、一人一人の意見の共有に時間がかかり、吟味する時間が不足したり、それぞれの集団に対する教師の指導が十分に行えなくなる可能性がある。 時間的・空間的な制約を超えた、双方向性を有するというICTの特徴を生かした協働学習の良さ生かすためには、時間不足のために、自らの意見を他に伝えるだけで学習が終了し、他の意見を受け入れ、自らの意見を吟味し、よりよい考えを練り上げる活動が行えないといったことは避けなければならない。</p>

## 学級規模の少人数化の必要性

## [小学校外国語活動]

### ○ 学習指導課程の実際

ここでは、第5学年「英語ノート1 Lesson 9 オリジナル・ランチ・メニューを作ろう」第4時の学習における1時間（45分）の授業を基に、40名の学級規模において、児童一人一人に確かな学力の定着、向上を図る上で理想的な時間配分を「想定時間」、実際に学校で実施されている平均的な時間配分を「実際時間」として以下に示す。

主な学習活動	想定時間	実際時間	学習展開上の課題
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">                     ねらい                      グループで、オリジナル・ランチ・メニューを作り、紹介する。                 </div>			
○Let's Chat チャンツWhat would you like?を言う。	5分	5分	全員でデジタル教材を活用してチャンツを言う。40人であっても、それ以下の人数であっても、本活動に要する時間は同じである。しかし、人数が多い方が、チャンツを聞いたり言ったりしにくい児童に、指導者が丁寧にかかわることが難しい。
○ペアでランチを作り合う。	10分	10分	ペア数が多いため、指導者が全ての児童に丁寧にかかわることが難しい。
○Activity 1 店屋さんとお客に分かれてやりとりをして、グループのランチ・メニューを作る。	25分	15分	児童数が多いため、グループでランチ・メニューを作るのに時間がかかる。
○Activity 2 グループで作成したランチ・メニューを紹介する。	20分	10分	各グループが作成したランチ・メニューを紹介するのに時間がかかる。そのため、単に発表で終わってしまい、聞く児童はその発表に飽きてくることもある。グループ数が少なければ、クイズ形式にして、児童同士でやり取りをして紹介させることが可能になる。
	[合計] 60分	[合計] 45分	

○少人数の学級規模であると、実際の学習展開時間であってもこれまでの学級規模に比べて、児童一人一人に確かな学力の定着、向上を効果的に図ることが可能となる。

## 外国語活動において学級規模の少人数化を進める根拠

### I 外国語活動の目標から導かれる根拠

○今回の学習指導要領の改訂においては、外国語活動が第5・6学年に位置付けられ、その目標は、以下のとおりである。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

○この目標を実現するためには、学習指導要領 内容に示されているとおり、実際に児童が、指導者とあるいは、児童と外国語を使って自分の思いを伝え合う活動を設定することになる。その際には、児童が自分の思いを伝えたい、相手の思いを聞きたいと思うような活動を設定することが大切である

外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。  
積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。  
言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。

○児童に実際に外国語によるコミュニケーションを体験させる際には、児童が初めて外国語に出会うことから、学習指導要領 内容及び指導計画の作成と内容の取扱いに示されているとおり、音声中心のコミュニケーションを体験させることになる。

外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。

外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。

以上のことから、たとえば、前ページに示した具体の活動、Activity 1において、児童が自分の欲しい食べ物をやりとりをしながらもらったり、相手に欲しい食べ物は何かを尋ねたりする場が十分に保障される必要がある。また、Activity 2 においては、単にグループで作成したランチ・メニューを紹介するだけでは、聞く児童には聞く理由を、話す児童には話す理由が見出しにくい。そこで、クイズ形式で発表させ

る。作成されたランチ・メニューを全て黒板に貼り、1つのグループに対して、他の児童が、設定された使用表現 What would you like?で尋ね、グループが I'd like ~. で答える。他の児童は、それらを聞いて、黒板に貼られているどのランチ・メニューがそのグループのものかを推測して答える、というクイズ形式にすることにより、聞く側にはクイズに答えるために聞く、話す側には出題するために話すという意識が生まれ、意欲的に聞いたり話したりすることになる。

## II 学習活動の展開から導かれる根拠

### グループ別学習における課題の克服

○外国語活動ではそのねらい等から、ペア、グループ、学級全体で外国語を使って実際にコミュニケーションを図る活動が設定されることになる。

○Activity 1 での40名規模と24名規模における教師の指導の範囲は、以下のようになる。

